# 門前町に生きる

## ― 過去・現在・未来 ―

### 第8回　旧成田町のオビシャ

新勝寺の門前には、およそ1.5キロ四方に7つの町があり、女性たちはそれぞれの町の子安さまを大切にお守りしてきた。2月18日はオビシャと呼ばれ、各町が1年に一度その子安さまをお祀りする日である。それぞれの町には子安観音の掛け軸やお厨子があって、毎年新勝寺の僧侶による法楽（ほうらく）が行われるが、そのほかに、お籠と呼ばれるご神体を7つの町が順繰りに回しており、受け渡しの当番にあたる町は、あつらえたそろいの着物と帯に身を包み、工夫を凝らした料理や余興の踊りでお互いに接待し合い、7年に一度巡ってくるはれの日を祝う。

お籠の宿主は1年間気が抜けない。もし何かあったら、まずお籠を守らなくてはならないので、夜もずっと同じ部屋で過ごした人もいるという。昨年お籠を預かった上町の滝澤家では、毎日欠かさず朝一番の若水と塩と米を供えてお守りしてきた。町の人が果物やお菓子を供えてお参りしてくれることもあった。お籠が次の町に渡る前には縄を縛り直して化粧直しをする。お籠の中に何が入っているのか見てはいけないと言い伝えられているが、7年たって再び回ってきたとき、お籠が大きくなったり、重くなったりしていて驚くこともあるそうだ。2月18日、僧侶の法楽を受けた後、お籠は1年を過ごした宿を出て、お世話になった人に抱きかかえられて儀式の会場に向かう。そこでは、お籠を渡す町と、引き受ける町から15人ずつの世話人が出て、昔ながらの歌の応酬をする。豪華なお膳、この日のために練習を重ねた余興の踊りが続き、やがて頃合いを見計らって千秋楽が歌われると、いよいよお籠が次の町に引き渡される。お籠が渡った町では同じ宴を設けて引き渡した町を接待する。ことしお籠は上町から幸町へ渡っていった。

平成26年2月18日。引き継ぎの儀式を終えて新しい宿に安置されたお籠。両隣の飾りはベンケイ

仲町―上町のオビシャでの歌の応酬。もてなす側の上町が下座に並ぶ（平成26年）

仲町には昭和18年にお籠を受け入れたときの記録が残っている。ここではオビシャという呼び名はなく「子安様年番」と記されている。昭和20年代後半まで、お籠の受け渡しは1月18日に行われていた。この年、前日の1月17日夜に、仲町の大野屋では婦人連が集まって日待（ひまち）と呼ばれる宴が催された。当日はまず5人がお籠を迎えに行き、1時間遅れて、今や遅しと2人がさらに迎えに出向いた。お籠を送り出す本町では、女性が全員居並んで仲町の使者を出迎えた。僧侶の法楽の後に一同でベンケイと呼ばれる飾り物を作り、5人には豪華なお膳を出してもてなし、あとの2人にはおわんを含めて4品の簡素なお膳でねぎらった。余興の踊りはないが、仲町の人々はごちそうの褒め歌を歌い、お籠を受けて町に戻ったあとは、その年の宿元の大野屋で、お籠を見送りに来た本町の5人に5円のお膳を、後からやってきたお供の2人には2円のお膳を出して返礼している。夜は町の女性24人が集まってまた宴を楽しんだ。質素な暮らしの戦争中、この行事はどれほど大きな楽しみだったのだろうか。

こうして、その時代を生きる人が、その時代のかたちで、町を愛して先祖の精神を受け継いできた。各地の町や村で行われてきた子安さまの行事が、時代の流れとともに縮小したり廃れていく中で、門前町では都市的な華やかさを加えながら、今なお重要な神事として大切に引き継がれている。これをどのように未来へ引き渡すか、女性たちはいつも心を砕いている。

（久保田滋子）

## 編集後記

11ページでお知らせした通り、広報課では昨年5月からフェイスブックで情報発信しています。開始当初の目標は毎日1回以上発信すること。これがなかなか難しく、取材のほかにも材料探しに四苦八苦。「いいね！」の数も思うようには伸びません。2014年サラリーマン川柳で6位入選したのは『「イイね」には「どうでもいいね」が 約五割』の句でしたが、やはり反応は気になります。皆さん、清き「いいね！」をよろしくお願いします。

平成27年3月15日号　No.1287

成田市のホームページ

http://www.city.narita.chiba.jp

リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。

広報なりたは、グリーン購入法に基づく基本方針の判断基準を満たす用紙、誰にでも読みやすいUD（ユニバーサルデザイン）フォントを使用しています。

平成27年3月15日号／月2回　1日・15日発行／編集発行：成田市役所企画政策部広報課　〒286-8585 千葉県成田市花崎町760番地　電話0476-22-1111（大代表）